



Title	雑誌『女性問題』に見る小説の役割について
Author(s)	南田, みどり
Citation	大阪大学世界言語研究センター論集. 2009, 1, p. 113-140
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/6426
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

雑誌『女性問題』に見る小説の役割について

南 田 みどり

MINAMIDA Midori

Abstract:

The Role of Novels in *Women's Affairs Magazine*

The first number of "Women's Affairs Magazine" was published in July 1999 by MNCWA (Myanmar National Committee for Women's Affairs) in memory of the establishment of 'Myanmar Women's Day'. The magazine was published once a year until 2004. In 2004 the publication of the magazine was succeeded to MWF (Myanmar Women's Federation). It has been published twice a year in July and December since 2005.

The content of the magazine is consisted of poems, cartoons, essays, novels and so on. Nearly the half of the poems, nearly 70 percent of the essays and nearly 80 percent of the novels have been written by women for these 10 years. The half of the pages are taken up by essays. More than 10 poems and about 10 novels appear in each volume constantly.

In this paper I studied the role of novels in "Women's Affairs Magazine" through 124 novels appeared in 12 volumes published in July 1999 to December 2007. The role of novels in the magazine is considered to be divided into 3 types, that is the role of patriotism, that of precept and that of life description. They are considered to contribute one another organically to sustain the level of the magazine.

Keywords : Burmese Novels, Women's Organization, Magazine for Woman

キーワード : ビルマ小説, 女性団体, 女性雑誌

はじめに

雑誌『女性問題』は現「ミャンマー¹女性連盟」の機関誌である。同誌は1999年に創刊

1 ビルマ(バマー)とミャンマーは同義語である。それは「ミャンマー連邦」の多数派民族名を表し、1948年独立後国名に併用されている。1989年軍事政権はビルマが一民族名でミャンマーは全住民を意味するという理由をあげて国名を「ミャンマー」に統一した。日本語の「ビルマ」はオラ

され、毎年1回7月に発行されてきた。2005年からは、7月と12月の年2回発行となり、2008年現在まで発行を重ねている。同誌は、巻頭詩、時事漫画、評論、小説等から構成される。そのうち評論が半数を占めるが、小説も毎号10点前後掲載される。

ビルマ出版界においては娯楽長編が多数出版される一方、純文学長編の退潮が見られて久しい。一方1980年代後半から10年余、「短編黄金時代」なる呼称のもと、総合月刊誌に短編が多数掲載された²。しかし現在は、文芸に特に力を入れる若干の雑誌を除き、短編も漸次撤退の傾向にある。それだけに、『女性問題』に掲載される短編・中編小説の点数は注目に値する。しかも『女性問題』は、読者を女性に限定したほぼ唯一の総合雑誌である³。言論統制下、純文学の停滞の中で、それらの小説は女性読者に向けて何を発信するのか。本稿は『女性問題』の任務や外形的特徴からその性格を踏まえたうえで、1999年から2007年までに発行された同誌掲載小説の役割を明らかにすることを目的とする。

1. 『女性問題』その任務

(1) 『女性問題』の発行体制

『女性問題』の任務を明らかにする前に、まず同誌記載事項からその発行体制にふれておく必要がある。軍事政権・国家法秩序回復評議会(1997年国家平和発展評議会に改称)は、1996年7月3日「全ミャンマー女性問題委員会」(以下「問題委員会」と称す)を結成した⁴。同年10月、軍事政権は同委員会の下に「全ミャンマー女性問題活動委員会」(以下「活動委員会」と称す)を結成し、「教育」「健康」「女性への暴力防止と更生」「経済発展」「文化」「若年女性」の計6部門を設け、州・管区・県・郡区等の行政区単位に下部組織をも設置した⁵。このような女性の組織化は、1995年の北京女性会議の宣言を尊重し、それを国家の政治的経済的社会的目的に合致するように具体化したものとされた⁶。

1997年7月、「問題委員会」総裁は同委員会の活動方針を提示した。それらはおおよそ次のようなものであった。すなわち、①女性の健康、教育水準の向上、経済的発展への援助、②外国文化流入による社会的退廃の防止、伝統文化と民族の血統ならびに「民族・言語・宗教」擁護にむけ女性の教育・組織化、③政府組織、非政府組織、連邦団結発展協会、女性関連各種社会事業団体との協力による平和的近代的大国家の建設、④国家建設基本原則の範囲での北京女性会議活動方針の活用、⑤現有勢力拡大による女性の国家的目標への貢

ンダ語からの借用語で明治以来使用されるので、ここでも基本的に「ビルマ」を使用し、「ミャンマー」は必要に応じ括弧書きとする。

2 小説の消長については南田 2001c ほかを参照されたい。

3 『タラプー』『アピョウスイン』など女性向けと銘打った月刊総合雑誌もあるが、読者は若い男女が多い模様である。

4 問題委員会総裁は国家秩序回復評議会第一書記の中将、議長は社会福祉・救済・再定住大臣の准将である。女性団体役員や『女性問題』スタッフの動向は同誌巻頭グラビアや目次等の記載事項を参照した。ただし作家ならびに現職以外は固有名詞を極力避け、役職名のみにとどめている。

5 活動委員会議長は前述の准将、副議長は女性、書記は政府・社会福祉局長で大佐であり、各部門長は女性である。なお女性団体の各機関の名称は「」内におさめている。

6 “Amyodhami Yeya Magazine” Jul. 1999, p. 28. この組織化については南田 2001a, pp. 54–60, 同 2008 p. 61 も参照されたい。国家の政治・経済・社会目的は注 28 を参照されたい。

献の5点である⁷。

「問題委員会」はまた1999年、同委員会が設立された7月3日を「ミャンマー女性の日」と定めた。これを記念して『女性問題』は創刊された。創刊号グラビアと目次によれば、スタッフは原稿検閲部7名、編集部3名で、発行人は「活動委員会」書記である。原稿検閲部部長と副部長は男性作家で、書記も男性であった。同部員の女性4名は、「活動委員会」の「経済発展部門」長、「文化部門」長、ならびに「文化部門」顧問の作家2名（うち1名は雑誌顧問）である。編集部は原稿検閲部副部長と、同部所属ではない女性作家ならびに男性各1名の計3名で構成された。

2000年、「活動委員会」は「環境保護」「情報通信」の2部門を増設した。『女性問題』原稿検閲部では、部員に「情報通信部門」長が加わり、部長と書記長が退任し、副部長が部長に、編集部所属の女性作家が書記長となった。顧問にもさらに女性作家1名が加わり、原稿検閲部は計8名（うち男性1名）となった。編集部は校閲部と改称され、男性1名が退任し、後任には原稿検閲部顧問で「活動委員会」の「文化部門」顧問の女性作家が加わった⁸。

2001年、『女性問題』に雑誌発行部が新設された。部長と書記長には前原稿検閲部長と書記長が、副部長には前原稿検閲部員で「活動委員会」の「情報通信部門」長が、顧問には前原稿検閲部顧問の女性作家2名が就任した。これに男性作家1名と男性有識者1名が加わり、計10名（男性3名）の雑誌発行部を構成した。このメンバーから書記長を除いた9名が原稿検閲部員を兼ねた。また校閲部は再び編集部と改称した。

2003年、「活動委員会」は従来の8部門を8小委員会に改組し、さらに「国際交流」「法律学習助言」の2小委員会を増設した。『女性問題』原稿検閲部は廃止され、雑誌発行部が拡充された。部長、副部長、書記長は留任で、部員の男性作家1名が退任し、政府・情報人間関係局の男性1名が補充された。さらに従来2名であった顧問に、「活動委員会」副議長、書記長、「女性への暴力防止と更生部門」長、「情報通信部門」員1名が加わり、「活動委員会」との連携が強化された。雑誌発行部は14名（男性4名）、編集部は発行部副部長と、発行部に属さない女性作家1名を加えて5名となった。

2004年版によれば、2003年12月20日、「ミャンマー女性連盟」（以下「連盟」と称す）が設立された。従来の「問題委員会」「活動委員会」は国家組織であって活動が制限されるため、これら「委員会」を存続させながらも、さらに広範な活動を可能とすべく国際的非政府組織（INGO）と交流するために「連盟」を設立したという⁹。「連盟」の目的としては、①平和的近代的に発展した大国家建設における女性の役割を高めること、②女性の権

7 “Amyodhami Yeya Magazine” Jul. 1999, pp. 27–29. なお②における「民族」を意味するビルマ語は“Amyo”が使用される。「民族・言語・宗教」は英領下1920年代のビルマ族の復古的民族主義運動のスローガンに同じである。

8 “Amyodhami Yeya Magazine” Jul. 2000の巻頭グラビアでは、さらに書記長補佐の女性1名、校閲者一名が紹介され、計10名とされる。校閲者は名前が記載されず性別不明であり、政府・情報通信局から派遣される。

9 “Amyodhami Yeya Magazine” Jul. 2004, p. 25.

利の保護，③女性の教育，医療健康，経済状況の発展と女性の安全な生活の保護，④原住民族の伝統文化風俗習慣をより尊重する精神を高めるための訓育，⑤女性への暴力防止と更生事業の秩序的実行，⑥女性・青年・子供の人身売買減少にむけた活動，⑦女性の権利を原住民族の文化風俗習慣相応に実現する際に国際的組織と交流すること，以上7点がある。1997年当時の「問題委員会」の活動方針と比較すると，「原住民族」対応の強調，女性への暴力防止，人身売買撲滅などが新たに加わったことになる¹⁰。

「連盟」総裁には「問題委員会」総裁が，議長には「活動委員会」の「女性への暴力防止と更生小委員会」委員長が就任した。総裁と議長を除き，名誉総裁2名ならびに議長以下全構成員が女性となった¹¹。「連盟」中央執行委員会は16の活動部門長から成る。活動部門には，「活動委員会」の10小委員会をそれぞれ10活動部門に改組したものに，「人身売買防止」「厚生定住」「組織」「規律」「財政計画」「原住民族問題」など6部門が加わった。また，これら横割り組織のほかに，中央執行委員会の下に，州管区執行委員会，県執行委員会，郡・区執行委員会，村落執行委員会が設置された。

『女性問題』雑誌発行部では，前「活動委員会」副議長，書記，「女性への暴力と更生小委員会」委員長，発行部顧問の女性作家1名が退任し，「経済発展小委員会」委員長が新「経済部門」長と交替し，政府・検閲登録局の女性を加え計11名（男性3名）となった。編集部員は留任であり，発行人は「活動委員会」書記から「連盟」書記に変わった。

2005年7月版によれば，「連盟」執行部では同年さらなる改編が行われた。「連盟」総裁，議長，副議長，書記長が退任し，16活動部門は，「組織」「計画」「規律」「財政」「情報」「国際」の6局と，「女性の保護と育成」「社会文化」「女性の向上」「原住民族伝統事業」「法律学習助言」「環境保護」の6活動部門に改編された。「情報通信部門」は「情報局」となり，「文化部門」は「社会文化部門」の下の3小部門のひとつとなった。それにともない，『女性問題』組織体制にも大きな改編があった。前「情報通信部門」員で雑誌発行部顧問が「情報局」長に就任し，同時に雑誌発行部長となった。前発行部長は副部長となり，前副部長は発行部員のまま「連盟」書記局員となった。部員の退任者は，創刊以来のメンバーだった女性作家，前「文化小委員会」委員長，男性2名，女性1名の計5名に及ぶ。後任として，前編集部員の女性作家が書記長補佐として発行部入りし，「連盟」の「経済局」員，女性作家，女性学識経験者，男性1名が補充された。

2005年12月版（8号）によれば，7月補充の男性1名は退任し，男性作家ならびに女性学識経験者と「情報局」員が加わって，13名（男性2名）の体制となっている。またこの年より，発行部スタッフには名誉総裁として「連盟」新議長，副議長，書記長が名を連ねるようになった。雑誌発行人は「連盟」新書記長となった¹²。

10 “Amyodhami Yeya Magazine” Jul. 2004, p. 25. ④⑦の「原住民族」には，シャン族，モン族，カチン族など，通常ビルマ族以外の民族をさすビルマ語“Taingyindha”が使用される。連邦には公称135の民族が居住するとされるが，異論もある。

11 「連盟」名誉総裁2名には軍事政権国家平和発展評議会議長と副議長の妻が，「連盟」総裁には同評議会第一書記兼首相が，議長にはその妻が就任している。

12 この急激な変動は2004年10月の「連盟」総裁である首相更迭の影響である。2005年より総裁は

2006年12月版(10号)によれば、「連盟」副議長がさらに1名増員となり、雑誌発行部名誉総裁に名を連ねた。2007年7月版(11号)によれば、「連盟」書記長退任にともない、雑誌発行人は従来の「連盟」書記長から「連盟」書記局員兼副「情報局」長兼雑誌発行部員に移った。2007年12月版(12号)によれば、「連盟」議長、書記長が退任し、新議長と新書記長が雑誌発行部名誉総裁に就任した。雑誌発行部はまた、2007年7月に書記長補佐の女性作家が退任し、12月に「連盟」の「カチン州組織部」長が後任に就任して13名(男性2名)の陣容を維持している¹³。

1999年の創設以来『女性問題』上部組織の女性団体の組織体制は、上述のような転変を重ねた。女性団体執行部と密接に連携することを義務づけられた『女性問題』は、そのような変動の影響を受けながらも発行体制を維持し続けたのであった。

(2)『女性問題』の任務

上述のような発行体制のもとで、『女性問題』はいかなる任務を与えられ、出版され続けているのか。創刊号では「ミャンマー女性の日」記念出版と銘打たれるだけで、その任務や編集方針は特に明示されていない。任務や方針は、「活動委員会」や「連盟」内部諸組織に関して述べられるだけである。そこで、同誌の雑誌検閲部、雑誌発行部のスタッフの一部が構成員を兼ねている「活動委員会」と「連盟」の「文化部門」「文化小委員会」「社会文化部門」や「情報通信部門」「情報通信小委員会」「情報局」等の任務や方針から『女性問題』のそれをうかがってみることにする。

これら文化関係組織と情報関係組織の任務や方針のうち、前者からは主として同誌編集の理念が、後者からは主として同誌の発信すべき情報とその方法がうかがえると考える。これら諸組織の任務や方針は『女性問題』1999年版から2005年7月版に主として掲載され、

空席となっている。新首相は総裁を兼ねず、3月の大会には来賓として出席し、“Amyodhami Yeya Magazine” Jul. 2005, p. 17によれば「連盟」に対し、国民の義務を順守し全国民団結をめざす国民的課題、連邦全民族の友好と団結という民族的課題、地域の平和、生活、教育、保健、文化向上という社会的課題、女性の立場の向上、女性の生活安全擁護という女性的課題を等しく実現に向け努力するようにとの指針を発表した。「連盟」の目的は2004年度から変更はないが、首相の指針からは女性問題への特化を抑制する傾向がうかがえる。また同誌p. 18で「連盟」は非政府組織NGOであることが強調される。しかし首相がNGOに「指針」を与えることは問題とされない。

- 13 2007年秋の首相死亡により、妻である「連盟」議長も自動的に退任した。2008年7月現在も同じ体制である。「連盟」は政権幹部の妻たちの組織であるため、その役職は彼女たちの夫である軍事政権幹部の去就と密接に関連する。“Amyodhami Yeya Magazine” Dec.2007, No. 12では雑誌発行部陣容は次のとおりである。〈〉内は作家としての筆名、()内は就任年、名前の後の肩書は同誌掲載のものを使用する。雑誌発行部名誉総裁：ドー・キンキンウィン「ミャンマー女性連盟」議長(2007)／ドー・キンレーミン同副議長(2005)／ドー・キンテッテー同副議長(2006)／雑誌発行部長：ドー・チーチャーウィン同「情報局」長(2003)／雑誌発行部副部長：ウー・ミョウタン〈マウン・スシン〉(男性1999)／書記長：ドー・ティンティンウィン同「文化部門」員(1999)／部員：ドー・ウエーウエー同「カチン州組織部」長(2007)／ドー・インイン〈ソーモンニン〉学識経験者(1999)／ウー・オウンマウン〈ミンムー・マウン・ナインモウ〉(2005)／ドー・ミヤミヤ同「書記局」員(2000)／ドクター・マ・ティンウィン学識経験者(2005)／ドー・ミヤミヤウィン教授 学識経験者(2005)／ドー・キンミンミン同「女性生活向上部門」員(2005)／ドー・キンソーオウマー同「組織局」員(2005)／ドー・チョウチョウティン〈マ・サンダー〉同「情報局」員(2005)／ドー・ニーラトゥウィン同「情報局」員(2005)

それ以降はそれらにもとづく具体的な活動報告が中心に掲載される。したがって、2005年7月版までの同誌から文化関係組織と情報関係組織の任務や方針をたどってみる。

まず文化関係組織に関してであるが、1999年版によれば、「活動委員会」の「文化部門」の活動目的は、国家による「市場経済」導入にともなって流入する外国文化の影響からビルマ女性を守ることである。具体的には、第一にビルマ女性の愛国心の涵養、第二に自国文化擁護精神の育成、第三に伝統遺産保護精神の育成、第四に外国文化の影響撲滅活動の実施の4点があげられる¹⁴。つづいて2000年版には、同部門の「戦術目標」が示される。それらは、第一に全民族の精神と徳性の向上、第二に文化遺産の保護、第三に「ミャンマー」文化遺産と民族的特性を消滅から守ることの3点とされる¹⁵。

2004年版によれば、「連盟」に改組後の「文化小委員会」の目的は、愛国心の涵養と自国の文化の尊重擁護である。具体的には、第一に民族の尊厳と祖国の尊厳を高め、「ミャンマー」文化保護に関する講演会を開催すること、第二に愛国心を基礎とした文化の擁護、第三に「ミャンマー」文化の枠内でのファッションショーやコンテストを開催すること、第四に文化的な挙措言行の護持のための訓導、第五に文化関係の評論を新聞雑誌・ジャーナルに執筆すること、以上5点があげられる¹⁶。

2005年7月版には、同小委員会の「社会・文化部門文化小部門」への改編後の方針があげられる。その第二点は前年の第三点に同じであるが、第一点は「ミャンマー」文化に関する講演会の実施、第三点は外国文化の侵入の影響と経済状況にもとづく社会的退廃をなくし、民族の血統を保護するための啓蒙組織活動をおこなうこととされる¹⁷。

以上のような文化関係諸組織の活動目的や方針は、次のように解釈されよう。ビルマ式社会主義時代は統制経済のもとで、外国からの情報も極端に制限されていた。しかし、軍事政権の市場経済導入にともない、制限付きではあるが外国からの情報が紹介されるに至った。この影響として生じたのが、愛国心や自国文化や伝統遺産軽視の傾向とされる。それは文化と民族の消滅を招じるものとして警戒されるべきで、とりわけ若い女性の服装髪形立ち居振る舞いに影響を与えているとされる。ゆえに、さまざまな行事やメディアを通して彼女たちの訓育が必要とされたのである。

次に情報関係諸組織の任務に目を転じてみる。2000年版によれば、同年設置された「活動委員会」の「情報通信部門」の任務は、「誤った女性観を国民の間に生ぜしめるような執筆出版をなすことなく、女性が家族、地域、国家のために手を携え活動に参加する有り様を国民大衆が認識するよう執筆し扇動する」こととされる。その戦術として、第一に女

14 “Amyodhami Yeya Magazine” Jul. 1999, pp. 30–31.

15 “Amyodhami Yeya Magazine” Jul. 2000, p. 30.

16 “Amyodhami Yeya Magazine” Jul. 2004, p. 30. 「連盟」設立の目的で強調された「原住民族」への「尊重」姿勢についての特段の言及はない。軍事政権のいうように「ビルマ」がビルマ族を、「ミャンマー」が全民族をさすとするならば、ここで使用される「ミャンマー文化」なる用語は全民族の文化を指すと解釈されるが、「ミャンマー」文化における「原住民族」の風俗習慣伝統文化の位置付けについての説明は見いだせない。

17 “Amyodhami Yeya Magazine” Jul. 2005, p. 23

性の旧態依然ではない姿、ならびに一貫性のある姿を明確に執筆すること、第二に見解の発信や執筆活動への女性の参加を現行の通信の諸方法ならびに新しい通信の方法を用いて促進することの2点があげられる¹⁸。これらの方針は、2004年版でより具体性を帯びたものに修正されている。それによれば、「連盟」の「情報通信部門」の任務は、女性に情報通信への関心をさらに持たせることとされる。その方針として第一に、女性が弱者であるという旧態依然とした言説を発信することなく、女性の能力と優秀な資質を示すよう、女性を高める叙述を行うこと、第二に女性に男性と同等の権利があることを示すこと、第三に女性による自己の見解・決意の発信を新しいコミュニケーションの手段によって促進すること、第四に女性を情報技術の発展によって向上させること、以上4点があげられる¹⁹。

2005年7月版掲載の改組後の「情報局」の方針7点は、2004年の「情報通信部門」の目的4点と比較すると、第一点は上記2004年の「部門」目的の第一に、第三点は「部門」目的の第四に一致する。しかし、それ以外に5点の新たな具体的な方針がかかげられる。すなわち方針の第二は、見解を提示し執筆する活動への男性の参加、第四は、「連盟」の女性の生活の安全と全面的発展ならびに女性保護の活動を内外のメディアで発信すること、第五は、情動的価値のある文献をまとめ永久保存する活動の実施、第六は、女性の知識の向上、愛国心と連邦精神育成のための啓蒙活動の実施、第七は、女性問題の啓蒙パンフレット、雑誌、ジャーナル、論文発行普及の準備などとなっている²⁰。

これら情報関係組織の目的・方針に文化関係のそれを併せ、『女性問題』の任務と考えられるものをまとめると、およそ次のようになる。『女性問題』はビルマ女性の諸問題の現状と展望について発信するものではないが、「問題」の根源を愛国心や伝統文化尊重精神の欠如に求めるがゆえに、愛国心と「ミャンマー」文化尊重の精神を涵養することを任務とする。そのために、第一に女性の優秀な資質と「恵まれた権利」の存在を発信すること、²¹ 第二に「連盟」の活動を広く発信すること、第三に女性からの発信を促進するとともに、男性もその発信に参加させることが必要とされる。

以上のような組織体制と任務の下に発行されてきた『女性問題』の外形的特徴を、以下に視覚的表象の側面ならびに、構成的側面から明らかにすることとする。

2. 『女性問題』の外形的特徴

(1) 視覚的表象としての『女性問題』

『女性問題』に使用される用紙は、他の雑誌と比較しても上質の部類に入る。サイズはB5版で、表紙は女性像によって飾られる。それは「問題委員会」や「連盟」の期待する理想的女性像であり、同誌の任務を視覚的側面で全うする表象であらねばなるまい。

18 “Amyodhami Yeya Magazine” Jul. 2000, p. 32.

19 “Amyodhami Yeya Magazine” Jul. 2004, p. 31.

20 “Amyodhami Yeya Magazine” Jul. 2005, p. 21.

21 ここでいう「男女対等の権利」とはビルマ仏教徒慣習法における結婚・離婚、財産相続権をさすと考えられる。具体的にはたとえば Myanmar Nainggan Amyodhami Aphwejouk 2004 や南田 1995, p. 12 注 (20) などを参照されたい。

まず創刊号では、大きな両の掌の上に三世代3名の秀麗な女性の上半身が描かれる。ともにビルマ族の伝統的なブラウスを身につけ、熟年女性は髪を結び上げ、壮年女性は結び上げた髪の一部を下に垂らして花を飾り、若年女性は髪を左右に分けて結わえている。図像は軍事政権が結成した女性組織のイメージを象徴する。それは抽象化され縮小され丸く縁取られて、「問題委員会」のロゴマークとしても使用される²²。マークには同委員会（Myanmar National Committee for Women's Affairs）の略号 MNCWA が記される。このマークは2004年に「連盟」に継承され、名称部分のみが MWF（Myanmar Women's Federation）と改められて使用されている。

2000年版以降の表紙は、手法とその象徴するものによって三種類に分類できる。まず第一に、絵画を用いて伝統文化を遵守する女性像を象徴するものがある。それらは2000年版、2001年版、2007年7月版（11号）に見いだせる。2000年版の図像では、数珠を手にした老女性の前で合掌する十代の少女2名が描かれる。ビルマ仏教徒の伝統行事で年長者に捧げ物をする雨季明けの跪拝式らしく、3名とも伝統的なビルマ族のブラウスと環状スカートのロンヂーを身につけ、少女たちは胸にショールをかける²³。窓の外に見える風景は寺院の屋根や樹木と青空である。

2001年版の図像では、青空と木々と寺院境内を背景に中年女性と少女2名が描かれる。少女たちは前年版同様のブラウスとロンヂー姿で、一人は三つ編みのお下げ髪、一人はボニーテールに花を飾る。少女たちが携行するのは、ビルマ伝統工芸の漆塗りの斎飯の櫃と重箱である。二人の後方から歩く中年女性は、茶色のショールとロンヂーに白いブラウスで、精進日の修行者の装いである。以上2点の図像は、伝統文化を尊重して、長上を敬い、敬虔な仏教徒として逸脱なく装う若い女性の義務と、それを導く年配女性の役割を象徴する。

2007年7月版（11号）は、時代をさかのぼり、ビルマ族王朝時代の装いとおぼしき古風なブラウスとロンヂーとショール姿で、斎飯の櫃を手し、日傘をさした若い女性が朝焼けの空と寺院を背景にたたずむ姿である。ビルマ仏教を精神的支柱とした伝統文化の重要性が再度強調される²⁴。

第二に、写真を用いて「問題委員会」や「連盟」の活動を表示するものがある。それらは2002年版、2003年版、2004年版に集中する。2002年版は、「問題委員会」ロゴマークのバッジを胸につけ、伝統的なビルマ族のブラウス、ショール、波形模様のロンヂーを着用し、ビルマ特産の宝石をあしらった指輪、ピアス、ネックレスで身を飾り、結び上げた髪にダイヤの髪飾りと花を挿し、勝利の葉フトモモの枝を入れた銀器を持つ美しい女性がほほ笑む写真である。その背景に囲み写真で、シャン州の諸民族とおぼしき様々な日常着

22 創刊号のロゴマーク説明では三女性を「ミャンマー的」に描いたとされる。

23 仏教行事に参加する女性は胸の膨らみを隠すためにショールを使用する。

24 この装いは「連盟」が擁護すべき「ミャンマー」伝統文化がビルマ族王朝文化と同一視されかねないものとなっている。「ミャンマー」的装いがビルマ族の装いと同義であるならば『女性問題』なりの説明が求められるところとなる。

の若年, 中年, 老年女性6名及び幼児3名が, ロウソクの灯のもと, 「ミャンマー女性問題委員会」のブルーのビルマ族伝統ブラウスとロンジーの制服姿の女性の導きのもとに読書する様子が示される。

2003年版は, 「問題委員会」制服姿の若く美しい女性の背景に, 同委員会幹部女性たちがビルマ西北端のチン州を訪れ民族衣装の若い「原住民族」男女と対面する姿が示される。2004年版は, 紙面下段四分の一の部分に, 手をつなぐカチン族, チン族, カレン族, ナガ族, ビルマ族, ラカイン族, モン族, シャン族の民族衣装姿の若く美しい女性たちが並び, 背景に大ホールで開催される「連盟」州管区代表者会議の様子が示される。いずれも「原住民族」を尊重する「問題委員会」「連盟」の活動を象徴したものである²⁵。

第三に, 絵画または写真, もしくは双方を用いて, ビルマ女性の美または能力, もしくは双方を表示するものがある。それらは, 前述の2007年7月版(11号)を除く2005年7月版から2007年12月版(12号)までの5点である。

2005年7月版は, 上下揃いの色柄のブラウスとロンジー姿で, ティアラを髪に飾り, 「ミス・ミャンマー」と記された徽章を襟掛けにして立つミス・アセアン・コンテスト「ミャンマー」代表女性の写真を背景に, 植樹する「連盟」女性, 橋梁建設する技師女性, 会議をする複数女性, 病人を搬送する看護師のデッサンがおぼろげに描かれる。同年12月版(8号)は, 「ミャンマー音舞コンテスト」に歌唱や器楽で何度も入賞した大学生が, ビルマ伝統楽器を背景に金メダルを連ねて胸に飾り, 「連盟」制服姿でほほ笑む写真である。2006年7月版(9号)は絵画を用いて, 「連盟」制服を着用し, 花を髪に飾った若い女性がたたずむ背景に, 徒競走中の2名の女性, 顕微鏡を覗く実験服姿の女性, ミシンをかける女性, 手術中の女性医師, コンピュータに向かう女性, 測量するヘルメット姿の女性などが描かれる。2006年12月版(10号)は, 同年7月「連盟」本部後援「連盟」ヤンゴン管区主催の「ミャンマー女性の日」記念行事における「ミャンマー女性の装いショー」の写真である。足もとまで長い髪をたらし上下揃いのブラウスとロンジー姿の女性1名の背景には, 上段に伝統と近代の調和を意匠したさまざまなブラウスとロンジーを身につけ壇上に並ぶ女性多数の写真が, 下段には足もとまで長い髪をたらした10名ばかりの女性が壇上に並ぶ写真が示される²⁶。2007年12月版(12号)は上下揃いのブラウスとロンジー姿の若く美しい女性二人が, 一人は髪を結び上げショールをかけ, ひとり腰までの髪を垂らしてほほ笑み, その背景にはビルマの女性サッカーチームの群像が映し出される。

以上のように『女性問題』表紙の女性表象は, 「問題委員会」や「連盟」の活動の発信とともにビルマ女性の美と能力と伝統文化遵守を象徴し, 文化ならびに情報諸組織の任務

25 写真における「原住民族」女性の扱いからは, 彼らが教化啓蒙されるべき他者の枠を超えるものではないことがうかがえる。

26 女性の美において髪は重要な要素とされる。仏典や処世訓や慣習法などの金言を集めた事典Thuhka 1971, p. 172は良き女性の姿5点に, 1) 姿の美しさ 2) 体力気力の良さ 3) 肌の柔らかさ 4) スタイルの良さ 5) 髪の良さをあげる。また同コンテストの衣装は多種多様な「原住民族」服の布やデザインを部分的に使用するが, ブラウスとロンジーというビルマ族的基本を逸脱するものは見られない。

を忠実に具現したものであった²⁷。『女性問題』表紙は、若い女性の服装の変化の波を「西洋的退廃文化流入」の悪弊ととらえ、伝統文化遵守による若い女性の精神生活確立の防波堤たらしめとする同誌の決意をも象徴するのであろう。

（２）『女性問題』の構成

次に、表をもとに『女性問題』の外形的な特徴をたどることとする。12頁の表には各年次ごとのジャンル別作品収録点数、作品総数ならびに頁総数をあげている。（ ）内は男性作家の内数である。ジャンル分けは同誌の基準におおむね従い、「漫画」「詩」「評論」「戯曲」「小説」とし、それらに該当しないものを「その他」とした。

ほかに、表には提示していない巻頭部分がある。巻頭部分は目次にも記載されないことが多く、頁総数にも含まれない。しかし同誌の構成上重要であるので、創刊号の巻頭部分を例に取って言及しておきたい。まず表紙の次に、雑誌名のみを記したタイトル・ページが来る。その次のページには、軍事政権のスローガン「我らの三義務」「政治四目的」「経済四目的」「社会四目的」²⁸が印刷される。この印刷は国内の全出版物で義務づけられている。次のページには「問題委員会」総裁巻頭言と議長序文、続いてロゴマークの説明、組織図、グラビア、目次へと続く。グラビアは「問題委員会」の活動のほか、「活動委員会」と雑誌検閲部の全員集合写真を掲載する。目次には、雑誌検閲部員名、編集部員名、発行者名、印刷者、表紙画家名、挿絵画家名、デザイン担当者名、コンピュータ担当者名、表紙検閲許可番号、原稿検閲許可番号が記載される。また発行部数もこの号では5000部と明示される²⁹。目次に続いて、詩と漫画が掲載され、その後に評論や小説が続く。

上述の配列は2003年版までおおむね変化がない。2002年版より軍事政権スローガンに「国民の見解」³⁰が追加される程度である。2004年版より、グラビアから雑誌発行部員の集合写真はなくなり、目次の前に発行部員名簿が提示され、グラビアには「連盟」執行部員、

27 『女性問題』表紙の女性の装いは現在ビルマで発行される総合月刊誌の表紙の女性の装いとは大きく乖離する。総合月刊誌表紙は一部には男女カップルの写真も存在するが、一般に女性の写真を使用する。彼らの服装は、『女性問題』創刊当時の1999年の時点でもモダンで多様なデザインのブラウスにロンデー姿だったが、現在は我が国の若者の日常の服装と変わらない。雑誌の表紙に関する限り伝統的なブラウスはもとよりロンデー姿さえは姿を消している。雑誌の表紙のファッションに検閲が「寛容」であることが、その内容に対する規制緩和を意味するものではないのは、「はじめに」で述べたとおりであり、一般雑誌におけるファッション「規制緩和」は別の側面から考察されるべき問題である。

28 およその内容は、「我らの三義務」が、①国家の分裂阻止、②原住民族の分裂阻止、③主権の堅牢安定、「政治四目的」が、①国家の安定と地域の平和と法の支配、②民族の団結再建、③憲法の断固たる策定、④憲法に相応の近代的に発展した新国家の建設、「経済四目的」は、①農業を基礎に全分野均等発展した経済の建設、②市場経済制度の明確な導入、③国内外から導入した技術と資本による経済の発展、④国家経済建設力を国家と原住民族・国民が手中に収めること、「社会四目標」は、①全民族の精神と品行の向上、②民族の尊厳と出生地の尊厳を高め文化遺産と民族的特質を消滅から守る、③愛国精神の昂揚、④全民族の健康堅持と教育向上などとなっている。

29 発行部数の掲載は2000年までである。2007年時点で30万の会員がいるとされるが、同誌は市販はされず、入手は困難である。2003年末の「連盟」結成時に全公務員女性が加入しているが、「連盟」役員でない一般会員の場合、大学教職員でも配布はされていない。とりわけ2005年12月版(8号)は、回収され焼却されたとの情報もあって入手は困難を極めた。

30 「国民の見解」では、外国に依拠する裏切り者・悲観主義者、国家の安定平和と進歩の妨害者、国家の内政に干渉する外国、国内外の破壊主義者の粉砕が促される。

各活動部門長、州・管区責任者等の集合写真が掲載されるようになった。2005年12月版(8号)より号数が付き、目次にも写真が一部掲載され、次に巻頭詩、グラビアが続くようになった。グラビアからは「連盟」幹部の集合写真が消え、目次の年月表示は西暦とともにビルマ暦が併用されるようになった³¹。また、「問題委員会」「連盟」総裁や議長の1頁分あるいは半ページ分の顔写真付き「巻頭言」「序文」も姿を消した。2006年7月版(9号)ではグラビアが一旦なくなるが、2006年12月版(10号)には復活し、現在に至っている。

次に表に沿ってジャンル別に概観しておく。「漫画」は時事漫画であり、作者はすべて男性で一般雑誌でも活躍中の有名漫画家を起用している³²。内容は、たとえば若い女性の非伝統ファッションを揶揄したものや、女性の「進出」に肩身の狭い男の悲哀を描くなど、男性の視点であることは否めない。一方「詩」の書き手は年度に応じてばらつきはあるものの、全12冊の執筆者延べ158名中女性が半数近くを占める。一般月刊総合誌では男性詩人の作品が多数を占め、女性詩人のそれは数えるほどしか見いだせない。また一般誌に掲載される詩は、自由韻律で一見主張に乏しく解釈が難解な「モダン」詩であるが、『女性問題』に掲載される詩は、主張が明解で形式的に整ったものが大半を占める³³。内容的には叙情的な情景描写詩も若干見受けられるが、女性礼讃、母性礼讃、国家建設における女性の役割を強調するものが中心である。

「評論」に分類されるものは、活動報告、軽快なエッセー、書簡、物語り形式まで多義にわたり、量的には収録点数のほぼ半数を占める。執筆者延べ361名中女性が三分の二を占める。この割合もまた一般誌に比べて高い³⁴。「評論」の書き手は、雑誌発行部(旧検閲部)および編集部員をはじめ、作家、評論家、その他ビルマ語・ビルマ文学や、ビルマ史の研究者、さらに医学界、法曹界からも広く起用される³⁵。

「評論」の内容は、第一に上部団体である「問題委員会」や「連盟」の活動の発信であり、大会、行事、各委員会部門の活動などが報告される³⁶。ほかに、国内組織活動による地方旅行、国際会議出席のための海外旅行などにおける経験を記した紀行も少なくない。内容の第二は、女性読者への啓蒙である。たとえば、ビルマ語に見る女性関係の表現、ビルマ文

31 ビルマ暦の年号は西暦から638を引いた数字となる。また月は太陰暦で、各月にビルマ語名称が付き、およそ太陽暦の4月がビルマ暦の1月となる。

32 女性の時事漫画作家はビルマでは皆無といえる。

33 「モダン」の潮流については南田2001c, pp. 94-96.を参照されたいが、その隆盛と検閲強化とは表裏一体の関係にある。形式を整えず枠を突破することも詩人たちのせめてもの抵抗と考えられる。一般総合誌のビルマ詩の書き手の男女別比率は、詩壇の現状を反映する。『女性問題』の詩人の男女比率からは、プロパガンダ詩の書き手に数少ない女性詩人を起用あるいは育成しようとする編集部の意図がうかがえる。

34 一般的傾向の一例として『キャリア』誌2007年9月号と比較する。同誌編集長は『女性問題』2007年12月版12号にも小説を掲載する(本文p. 21参照)女性作家キャリア<ウェイザー・テイパン>で文芸に力を入れ若手作家多数を育成している。同誌掲載漫画6点、詩8点の作者は男性のみで、評論・記事30点中女性のものは10点、短編小説10点中女性作品は1点である。

35 必ずしも軍事政権寄りではない作家も含まれる。たとえば軍事政権に対する批判的姿勢で著名な女性作家ルドゥ・ドー・アマー(1915-2008)は2002年版p. 31-33「若い娘とは」で昨今の若い女性の装いについての批判を寄せている。

36 組織の方針・目的から、組織の特性は明らかとなるが、活動記録は紙面に制限があるためか、参加人数が不明であるなど叙述に詳細さを欠くきらいがある。

表 ジャンル別収録点数（ ）内は男性

年次	漫画	詩	評論	戯曲	小説	その他	総計	頁総数
1999	10(10)	15(8)	26(14)	0	9(2)	5(5)	65(39)	242
2000	9(9)	14(8)	31(12)	0	10(2)	3(3)	67(34)	252
2001	5(5)	16(5)	33(13)	0	9(2)	2(2)	65(27)	222
2002	7(7)	13(9)	31(8)	0	11(5)	2(2)	64(31)	244
2003	6(6)	17(8)	29(10)	0	11(4)	2(2)	65(30)	234
2004	6(6)	15(9)	35(10)	2(0)	12(1)	2(2)	72(28)	256
2005	6(6)	15(4)	33(5)	1(0)	10(1)	2(1)	67(17)	226
2005 8号	5(5)	10(7)	31(8)	0	9(2)	0	55(22)	231
2006 9号	6(6)	10(4)	28(11)	0	10(1)	0	54(22)	220
2006 10号	6(6)	11(6)	30(7)	0	11(2)	0	58(21)	194
2007 11号	6(6)	11(8)	26(10)	0	11(2)	0	54(26)	212
2007 12号	8(8)	11(5)	28(8)	0	11(3)	0	58(24)	204
計	80(80)	158(81)	361(116)	3(0)	124(27)	18(17)	744(321)	

学の中の女性, ビルマ史の中の女性, 仏典の中の女性, ビルマ文化と女性, ビルマ仏教徒慣習法における女性の権利, スポーツと女性, 女性と健康, さまざまな職業に「進出」した女性など, 主として女性の優秀な資質と, 「恵まれた権利」など「伝統文化」のすばらしさが発信される³⁷。内容の第三として, ビルマ版女大学ともいふべき訓育的評論がある。母から娘へ, 父から娘へ, 恥じらいと威厳を持った「ミャンマー」女性らしさ, 思慮深く心と口と身体を慎む「ミャンマー精神」などが説かれる³⁸。

「戯曲」はいずれも喜劇で, 飲酒癖の夫と別れられない妻, 虚飾の結婚式を排除する若い二人の勇気など世相批判的の2編と, 妊娠させられ男に逃げられた若い娘の訴えを取り上げた「連盟」の活躍を宣伝する1編がある。

なお「その他」の項目は, 「お笑い」「占い」ならびに「問題委員会」や「連盟」の総裁巻頭言, 議長序文である。そのうち「お笑い」は創刊号限りで, 「占い」は2000年版限りで姿を消している。詩, 漫画, 小説, 評論と並んで, 芸能記事と占いはほぼすべての一般総合月刊誌に掲載される。『女性問題』が芸能記事を排し, 占いの掲載もやめたことは, 一般誌と一線を画す「見識」の表明であろう。

これら表紙と構成を見る限り, 点数的に多少の変動はあるものの, この9年間, 『女性問題』は「問題委員会」「連盟」の諸組織の方針の忠実な実行に努め, 女性の書き手を多数起用しつつ, 雑誌の質を一定に保ち, 手堅い編集を持続してきたかに見える³⁹。

3. 期待される小説像

(1) エーピェウエーキンの掲載作品

『女性問題』に掲載される小説は, 上記の分類では124点ある。男性の作品はうち27点である。執筆者は56名で, うち男性は14名である。掲載小説の中には長編と銘打たれたものもあるが, 分量的には中編規模のものであり, 連載長編はない。124点のうち翻訳6点と『女性問題』発行以前に他誌に掲載されている3点についてはここでは扱わない⁴⁰。

『女性問題』に見る小説の役割を考えるにあたり, 同誌の任務を再確認すれば, それは

37 内容的問題については南田 2001a と同 2008 などに若干言及はあるが, いずれ稿を改めねばならない。たとえば外国文化や「原住民族」文化の紹介は皆無に近く, 1999 年版 p. 97-100 にナガ族女性の抗日闘争を, 2005 年 12 月版 (8 号) p. 65-66 にシャン女性の反英闘争を断片的に叙述するのみであり, 外国人偉人女性は 2007 年 12 月版 (12 号) でマザー・テレサやマリー・キュリーなどに言及するのみである。2000 年版 p. 214-219 におけるビルマ女性関係文献目録は有益であるが, 必要な文献すべてが網羅されるわけではない。人口の 2 割近くが信仰するキリスト教イスラム教など非仏教徒の文化に関する記述もない。

38 女性に向け発信される要求は質量ともに男性と同等ではない。女性に厳しく男性に寛容なビルマ社会規範の二重基準については南田 2001b 解説, 同 2002 などを参照されたい。

39 注 13 にあるように雑誌発行部で 1999 年 2000 年就任の部員 4 名が現在も残留する。彼らが 9 年間雑誌の均質化に貢献したと見ることができる。

40 翻訳は, 英語からの訳でベトナム短編が 2001 年版, 2002 年版, 2007 年 7 月版 (11 号) に, ラオス短編が 2005 年 12 月版 (8 号) に, 英米のものらしき短編が 2004 年版と 2007 年 12 月版 (12 号) に掲載される。2001 年版掲載分を除き出版年は明示されない。いずれも日常生活の描写作品である。また既発表短編は筆者の把握する範囲では「解放」(2004 年版フニンウエーニエイン), 「空気」(2005 年 12 月版 (8 号) マ・フニンブエー), 「ケッカレーの耳飾り」(2006 年 12 月版 (10 号) ミャフナウンニョウ) であるが, 外にも存在の可能性は否定できない。

前述のように、愛国心と「ミャンマー」文化尊重の精神涵養のために、女性の優秀な資質と「恵まれた権利」の存在と「連盟」の活動を発信すること、発信には男性作家も参加することであった。男性作家の参加は上述のとおりである。そこでまずここでは、残る『女性問題』の任務と掲載小説とのかかわりを、最多執筆者の全掲載作品から考えてみる。執筆者 56 名のうち、創刊号以来 12 冊に 11 点の作品を掲載しているのは、エーピエウエーキンとマ・サンダー (1947 -) の 2 名である⁴¹。ほぼ常時執筆者である彼らの作品は、『女性問題』の任務にいかに応えているのであろう。

エーピエウエーキンの 3 点は、軍人の家族や軍人とのかかわりを描くものである。「愛を控えたのではありません」(2001 年版)は、軍人の妻の成長を描く。作者は、夫の任地南部シャン州に赴いた新妻に、前線に出た夫の不在と慣れぬ家事へのとまどいの中で二人の娘を育てさせる。昇進した夫には娘の結婚式で涙させ、妻の平静さと対比させて、列席者の語り草とさせる。「いまも恋しい」(2002 年版)は、心臓病で出産を禁じられた裕福な一人娘と将校との愛しながらの別れを描く。5 年後、妻に死なれて息子を連れた将校との再会も、作者は無言の別れで閉じる。「拘束なき鎖」(2007 年 12 月版 12 号)は幼なじみの友愛を描く。作者は、裕福な一人娘に文学を通して男友達との友情を育てさせ、将校と結婚後も互いに切磋琢磨して創作に励ませる。作家となった男友達が独身を通したのが、求愛しそびれたためであると明かした後も友情を継続させ、主人公の娘の結婚式に作家を招かせ、家族ぐるみで旧交を温めさせる。

これらの共通点は、裕福な家庭に生まれ、親に大切に育てられた主人公による一人称の語りと、主人公の伴侶あるいは恋人がかなり年上の将校として設定されるところにある。家庭を持つ主人公の場合では、夫は後年かなり昇進し、二人の娘に恵まれて裕福な生活をしているとされる。軍人を登場人物とする作品は、一般雑誌には皆無に近い。軍人の形象化は慎重を期すべきであるだけに、それが当事者のみに許された権利であるとすれば、その作品から作者自身の環境もある程度類推が可能となろう。

このほか軍人一家ではないが、裕福な家庭の主婦の感慨を描く 2 点がある。「変わらぬ流れ」(1999 年版)で作者は、運転手付きの車を持ち、下の娘は医大生で、養女も数名いる家庭の母親に、長女の初めての出産に気をもませ、娘の母性愛に驚嘆させる。「あなたのわたし」(2004 年版)では、大学卒業後 10 歳年上の男性と結婚させられた我がまま娘を、夫による教育で夫の仕事の片腕を務める賢妻とならしめ、家中を支配するのみならず、夫をも意のままにするに至らせる。夫に従うようにみせて、夫を操縦する賢妻の心得を伝授するのである。

これら主人公の結婚で、エーピエウエーキンは親の合意あるいは意志を重視する。ビルマ仏教徒慣習法は双方の合意に基づく結婚の自由を保障し、親の合意がなくても二人が出奔して生活をともにすればビルマの世間は夫婦として認知する習慣もある。しかし、それが往々にして幸せな結末につながらないことを提示するのである。裕福な家庭に養女とし

41 受賞記録や作家録などで確認される者のみ作家名の後に生年没年を記す。

て迎えられた姉を妹の視点から描く「功德が運命に及ばなければ」(2006年7月版10号)では、両親は実の娘と養女を差別せず、むしろ姉を優先するが、それに満足せず我を通した姉娘が、大学在学中に駆け落ちして家族を悲しませる。作者は、子供を抱え、無職の夫の飲酒に悩まされ、分与された財産も使い果たした姉を、医師となり技師と結婚して二人の子供に恵まれた妹のもとへしばしば無心に訪れさせ、最後に姉の夫を病死させ、それらを彼女に定められた運命として突き放す。

エーピエウエーキン(エーピエウエーキン)は裕福な家庭の周辺のみならず、さまざまな階層の人生にも分け入る。放蕩的な父と誠実な息子の生きざまを対比する「誓いをたてました」(2003年版)では、金持ち娘をくどきおとして婿に取った父に、女性遍歴を重ねさせ、飽きれば妻の家に戻ることを繰り返させたあげく、田舎出のお手伝いと出奔させる。そして母の手で育てられた息子を有能な教師に成長させ、父親の血を恐れて敬遠する町の人々を尻目に裕福な娘の求愛を受け入れ結婚させた後、二人の子を産んで病死した妻を偲んで再婚せず子供の成人後仏門に入らせる。

エーピエウエーキンは、男の側の放蕩や飲酒などの破戒行為が子供の人生に及ぼす影響にも言及する。「愛しさの縛り」(2005年7月版)では、裕福な少女に前世の記憶を蘇らせ、前世に家族であった貧しい一家と家族ぐるみで交流させる。前世での娘は、母が倒れ、雨の中を走って隣村で女と暮らす父を呼びに行くが、酔った父が帰宅を拒否し、失意のまま雨の中を帰宅して発熱後世を去っていた。前世での恋人は独身のまま年を重ね、娘の墓の隣に埋葬される。作者は転生後成人した娘に平和な家庭を営ませるが、雨の日に時折前世の恋人の記憶を蘇えらせる。「愛してくれましたか母さん」(2006年12月版)では、裕福な家庭の養子となった主人公を、母危篤の報に病院へ行かせ、意識不明の見知らぬ女性と対面させる。かつて主人公の父が泥酔して妻と間違えて友人の妹を犯し、身ごもった彼女がそのまま恋人と結婚して出産し、生まれた主人公が実父の家に引き取られたという出生の秘密を明かし、主人公に二人の母に感謝させる。

「波羅蜜の友の愛」(2007年7月版11号)は、瞑想修行に出掛け、修行する妻を励ます夫の姿に感銘を受けた「私」が、ビルマ仏教文化の精神生活における優位性を説く随想風小説である。『女性問題』では、既述のように評論に分類されるものの中に物語形式の作品が見受けられた。これとは逆に小説と銘打たれるものの中にも、このような随想的な作品が散見される。一人称で語り手の日常的感慨を叙述する随想的私小説もまた、ビルマ式社会主義の言論統制の厳しさの中で、70年代後半から増加しはじめたものである。

『女性問題』掲載作品に限れば、エーピエウエーキンの人物像には両極分解が見られる。すなわち、男性主要人物は品行方正な軍人、教師、妻を教育する夫、恋人に操をたてる農民であるか、逆に飲酒や背信行為によって女性を苦しめる父や夫である。女性の多くは親によく従い、結婚後は良妻賢母となるか、逆に男の飲酒や背信に苦しむ娘や妻たちである。作者の関心は人物描写を深化させることよりむしろ、類型化された登場人物をちりばめ、その行為を中心に筋を構成することにあるかに見える。それが作者のメッセージをより明確に読者に伝える手立てとして作者に意識された上でのことであるとすれば、それは作者

における小説のプロパガンダ的役割の認識の反映にほかなるまい。

エーピェウエーキンの作品を『女性問題』の任務と照らし合わせれば、「連盟」の活動を発信する作品がなかったとはいえ、それらは「ミャンマー」文化を遵守する賢女である主人公女性を提示することによって、女性の優れた資質と文化の優位性を関連づけた。その意味で、作品はおおむね同誌の任務に沿ったものと言えよう。ただ、類型化の嫌いはあれ、周辺人物としての女性像から人生の苦しみが垣間見えたことは注目に値する。それは「恵まれた権利」を享受するはずの女性像とは程遠い。ビルマ仏教徒は現世の苦しみを前世の行為の結果と解釈する。信仰深い作者が、前世で定められた運命のなせるわざとして彼女たちの困難を描いたのであったとしても、それは現代ビルマ社会におけるそのような困難の存在を作者が認識し、形象化を試みた事実を提示する。作者の意図にかかわらず、はからずも作品は現代ビルマの女性問題の一端を提示する役割をも果たしたといえよう。

(2) マ・サンダーの掲載作品

マ・サンダーは現代ビルマ文学界を代表する作家の一人である。「連盟」の「情報局」員として2005年から『女性問題』の雑誌発行部員を務める。1965年より雑誌に短編を書き始め、1972年に初の単行本長編小説を出版し、現在まで長編13冊、中編2点、雑誌掲載小説200点以上を世に出している。民族文学賞を、1994年と2002年に長編部門で、1999年に短編集部門で、2006年に青少年文学部門で受賞している⁴²。

彼女が小説を書き始めたのは、文学が社会主義建設においてそのイデオロギー部門を担うことが義務づけられた「ビルマ式社会主義」時代であった。しかし、ビルマ式社会主義賛美の作品は次第に減少し、言論統制の厳酷化ともあいまって、社会的主張を明確にせずさまざまな階層の日常を描写する「人生描写小説」⁴³が増加する中、マ・サンダーは70年代から80年代にかけて、他の数名の作家とともにその旗手となった。そして、現軍事政権登場後、彼女の作品には一定の社会的主張がうかがえるものが現れた。それは『女性問題』掲載作品にも如実に見られる。

作品11点のうち5点は、中年主婦の日常的感慨、中年夫婦の日常、夫婦に忍び寄る老いの悲哀などを描く。「あなたの力の元」(2000年版)で作者は、妻にたいする思いの変化を夫に語らせる。美人で金持ちの恋人との結婚を親の反対で断念した彼は、妻を愛していなかった。作者は妻を病床に付させ、4人の子供と生活に格闘し役所に出勤する4日間で、いかに妻に尽くされていたかを夫に思い知らせる。「舌と歯」(2001年版)⁴⁴で作者は、さ

42 Nainggandaw Eyechanthayaye hnit Hpawunhpyoye Council 2007, p. 23. 彼女の作品は英語日本語ロシア語タイ語にも翻訳される。日本語訳はマ・サンダー 1985, のほかマウン・ターヤ 1989, pp. 21-51, 南田 1998, pp. 149-160 にも収録される。民族文学賞については注 48 を参照されたい。

43 ビルマ社会主義の言論統制が生んだ内容と手法の統一的発現である「人生描写」はビルマでは「リアリズム」と訳する向きもあるが、意識の流れに従い時間を錯綜させ、複数視座の使用、象徴的寓話的な展開など手法は多様である。南田 2001c, pp. 86-88. も参照されたい。

44 「夫と妻は舌と歯」というビルマのことわざをタイトルに用いる。協力が必要であり、対立すると血を流す。

らに年配の、口げんかの絶えない夫婦の日常を示す。ささいなことで口論となり、一週間無言の二人が、友人の来訪後口をきくようになるが、いつしか口論を復活させ、娘たちあきれさせる。この2編で作者は、病気やけんかで中断した妻の夫への日常的献身を浮き彫りする。それは、魚料理の骨を抜き、飲み物を運び、浴室の外でタオルを持って控え、出勤用の衣服と持ち物を準備するなど、母が子になすも同然の献身である。

一方マ・サンダーは、妻の家庭からの脱出の企ても「蜘蛛の糸」(2004年版)で描く。妻が10日の瞑想修行で不在であることに、夫も子供たちも敢えて反対しないが、出発の日子供の一人が発熱し、今一人は腹痛をおこし、脱出計画はあえなく挫折する。作者は主人公に家庭を蜘蛛の巣に見立てさせて、納得させる。主人公は蜘蛛の巣にかかった蛾に目を止め、なぜ弱い蜘蛛の糸に虫が罫め捕られるのか不思議に思うが、彼女が瞑想修行を断念したとき、ふと見れば蜘蛛の巣の蛾は動かなくなっていた。これら3点はいずれも、従来のマ・サンダーの「人生描写」小説同様、社会的主張を明確にしない日常の断片の描写であった。

残る2点は、日常的断片の中に社会的主張を取り入れた作品である。「創意工夫」(2005年12月版8号)は、到来ものの塩辛いウナギの干物を手を変え品を変え調理して使い切る主婦の知恵を描く。主婦の心配はただひとつ、3人の子供が外国人と結婚することとされる。「間違いではあるけれど」(2006年7月版9号)は、物忘れが多い夫婦が一日に2つの結婚式をかけもつ顛末を描く。最初の式の新婦は日本人だが、ビルマ文化を重視した伝統的な式で夫婦を感激させる。次の式は西欧風の衣装と音楽で、二人を嘆かせる。若者の外国文化重視は、夫婦の「民族・言語・宗教」消滅への危機感を煽る。日常的断片のユーモラスな描写の中に、『女性問題』の任務である伝統文化尊重精神の涵養が主張される。

これらのほかに、伝統文化尊重と愛国心涵養をさらに明確に主張する作品がある。「希有だが存在します」(2005年7月版)は、アメリカの市民権を得た幼なじみからの求婚への主人公の拒絶を会話中心に描く。「井の中の蛙でも井戸を愛するわ」という主人公は、「彼の地で生まれた子供の結婚相手がビルマ人以外だったら？生まれた孫が黒い肌に縮れ毛か、青い目に黄色い髪だったら？仏教以外の宗教を信仰することになれば？アメリカ国旗に敬礼することになれば？」という数々の仮定に耐えられない。ゆえに作者は彼女をして、「我が民族と国家を愛しているから同行はできない。それを許してくれとは言わない。それよりも、我が民族と国家よりもあの国を愛しているあなたをわたしは許さない」と恋人に告げさせる。民族の純血と仏教文化護持を前面に押し出すこの作品は、マ・サンダーの「愛国的」小説の書き手としての一面を物語って余りある。

マ・サンダーはさらに、女の知恵が人生の荒波を越えさせる作品2点で、ビルマ女性の発揮する日常的能力を提示する。「母の金鎖」(1999年版)は、父を亡くした4人の子供が母を支え、たくましく明るく生きる笑いの絶えない家庭を、末娘の視点で描く。彼らが困難にあうたびに母はタイ製の高級金鎖を見せ、いざとなればこれが売れると励ます。8年後子供達は、将校、技師、事業家、勤労学生となって、母に新しい金鎖を贈り、古い鎖をバゴダに寄進するよう勧める。そこで母は、古い鎖が近くの市場で買った偽物だと明か

す。「ココヤシの中の甘い液」（2002年版）は次女の視点で、賢い姉の機知を描く。10歳以上年上で母親代わりの姉は、3人の弟妹に、庭のココヤシの液は子供が悪い子になったら苦くなると教える。弟が財布の金を盗んだ日、液は苦かった。父が病死し、母が旅先から戻らなくなり、母の商売を受け継いだ姉は、「遠隔地で入院中の母」に手紙を書くよう弟妹に勧め、彼らが手紙を姉に託すと「母」からは返事が来る。「母」の励ましで成長後、医師、技師、将校になった子供達は、急死した姉の遺品から、子供達が「母」に当てた手紙の束と、ココヤシに苦い液を注入する際に使用したと思しき注射器を発見する。偽の金鎖が子供達を励ましたように、母の死を伏せて姉が母に代わって書いた偽手紙も子供達を励ました。2作品ともに、成長した子供達の職業に将校が含まれるのは、困難を克服して賢明に育て上げた子供の一人を国家に捧げるのが期待される家庭像だという作者の意識の発現であろう。

女性の愛国心や機知を提示したマ・サンダーは、恋愛至上主義にも異を唱える。「家を打つ音」（2006年12月版10号）の28歳の主人公は、恋人が2歳年下であり、給料の安い公務員だがアルバイトに励む才覚もなく、精神障害者の姉がいて遺伝の可能性もあり、彼を頼る係累も多いなどで、母から結婚に反対されている。主人公は隣家に入居した10代の貧しい駆け落ち夫婦を好ましく思うが、夫婦は子供ができると貧しさに耐え切れずいさかが増え、妻は親に連れ戻される。「基礎がない家は壊れるよ」と母親から諭された主人公は、最後の決断を迫られる。一方、恋人の積極的なアプローチに躊躇する妹が、姉の歯の痛みと抜歯につきあう過程で、恋人との別れを決意するまでを描く「歯痛の苦しみ」（2007年12月版11号）では、抜歯と別れの決意が重ね合わされる。これら2点は若い女性に、愛だけでは生きられないと説き、愛と結婚を結び付ける「愚行」を戒める。エーピエウエーキン同様マ・サンダーもまた、結婚にあたり親の判断や周囲のお膳立てを重視し、恋愛至上主義に異を唱える「女大学的」啓蒙を発信するのである。

「時と潮」（2007年12月版12号中編）でマ・サンダーは、2人の女性の50年近い友情を、会話を中心に構成する。隣同士で遊ぶ二人、恋人との交際に上の空となる友、恋人に書いた手紙が発覚して父に殴られる友、駆け落ちし娘を生んで実家に入出入りを許される友、恋人ができ勉強しない娘を殴る友など、親友のさまざまな姿を主人公との会話で浮き彫りにした後、晩婚で生まれた娘と避暑地の海岸に立ち、亡き友を偲ぶ主人公を提示する。しかしそれにとどまらないのがマ・サンダーたる所以である。彼女は主人公を現実に戻し、「まだやることがあった」と思い起こさせ、「韓国ドラマが始まったら教えてちょうだい。それが終わってからお祈りをするから」と娘に命じさせる。愛を優先させ親を裏切った因果として娘の反抗に悩む友人と、職業が確立した後に結婚した主人公の賢明さを対比させるだけでなく、彼女は「白髪の1本1本が死神の勝利の旗」という老いの日常と、迫りくる死への感慨をも主人公の口を通してユーモラスに提示する。

エーピエウエーキンの作品は、裕福な環境の女性の人生や数奇な運命に翻弄される人々を描きながらも、期せずして男の飲酒や背信に苦しむ女性たちの問題を垣間見させた。しかしマ・サンダーは、どこにでもいる市井の人々の人生を諧謔的に描写する中で、伝統文

化尊重、愛国心の涵養、女性の優秀な能力の提示、恋愛至上主義の否定など、巧みに啓蒙を織り込んだ。深刻な女性の問題を垣間見させるすきを与えず、作品の世界に読者を引き込む技量は、『女性問題』の期待する小説の名に値すると言わねばなるまい。

4. 『女性問題』掲載小説三つの役割

(1) 「愛国的」役割

前章における2名の作家の掲載小説の役割はおおむね、「愛国的」役割、「女大学的」役割、「人生描写的」役割に大別できると考えられる⁴⁵。そこで本章では、それぞれの役割について、残る93点の作品を具体例としてさらに見て行くこととしたい。「愛国的」役割を果たす作品は、濃淡の差はあるが『女性問題』の任務が明確にうかがえるものをさす。すなわちそれらは、愛国心と「ミャンマー」文化尊重の精神の涵養のために、女性の優秀な資質と「恵まれた権利」の存在や、「連盟」の活動を発信する作品で、44点ある。

まず「ミャンマー」文化尊重を主張するものは、外国文化の影響濃い級友と交流しながらも伝統を忘れない3姉弟の半生を描く「雲に覆われない黄金の月」(2002年版ユワディー・キンセイインフライン 1930-2006)、アメリカの息子を訪れた母が精神を病む遠縁のビルマ女性に衝撃を受ける「大国の人々の病」(2003年版同)、アメリカに住むが伝統文化を重んじるビルマ人夫婦を描く「国は違えど精神はミャンマー」(2006年版ザガイン・セイインセイイン)、アメリカに住む恋人との結婚を、民族の純血が守れないと母に反対されて諦める娘を描く「黄金の絨毯と一緒に座りたくない」(中編 2006年7月版10号モウパンムン<ラーマニヤ>⁴⁶)など4点である。

女性の優秀な資質を発信するものは、第一に、軍人の妻の献身を讃える作品である。その自覚的成長や出産体験を描く「波羅蜜の友から」(2006年7月版9号テッテッティン<ピンニャイエー>)、「真の力の主 母の息子である」(2006年12月版10号マ・レー<モンユワ>)や、戦闘における妻たちの女性部隊の「活躍」を描く「女性勇士」(2007年12月版12号イエーインティーハ男)など3点がある。なお同誌における国軍女性兵士の形象化は「女性勇士」で初めて登場した。対峙すべき「敵」が何者かは明示されず、主人公がカレン女性らしきことにも注目される⁴⁷。

女性の優秀な資質は第二に、さまざまな職業の前線で活躍する女性像を通して発信される。まず、女性技師集団による橋梁建設を地元民の視線で描く「ゆりかごを動かす手の勝利」(2003年版ソーミズー<ピャーポン>)、保育所開設に成功する女性を描く「山を崩すツムギアリ」(2005年7月版ナマウ・アニーチョウ)、南部海岸の町で娘を片腕とし

45 必ずしも一つの作品が一つの役割を担うとは限らず、複合的なものも存在するが、ここでは顕著に表れる特性を優先している。

46 ()内には掲載誌、作者名、判明する場合は生年没年、男性の場合はその旨明示する。ビルマの人名に姓はなく、同名が多いので、識別のため、出生地、学位などを名前の前後に入れる作家もあり、それを<>内に示した。

47 カレン民族同盟 KNU は、1948年のビルマ独立の一年後から反政府武装闘争に入り、現在も最大の反政府武装勢力である。1997年軍事政権によって KNU の分派民主仏教徒カレン軍 DKBA が結成された後、KNU は二つの敵を相手に戦闘中である。

て水産業に成功する女性を描く「雲を許す矢」(中編 2005 年 12 月版 8 号ミチャンウエー *⁴⁸1953-) など事業の成功を示す作品が 3 点ある。ただし保育所業と水産業の女性は、ともに夫の裏切りが事業発展の原動力とされ、女性の有能な資質と「愛」の共存が不可能であることが強調される。

逆に、愛の成就に女性の優秀な資質が不可欠とされる恋愛小説も 2 点ある。「金の木に止まる金鳥」(1999 年版ユフディー・キンウー 1930-) では、美人で家事の不得手な外国好きの妻と死別した医師が再婚する小村の教師が、「謎の恋人」(2006 年 7 月版 9 号ソーモンニン 1920-) では、国境地帯の銃撃で負傷した男性を助ける看護師女性が愛の勝者とされる⁴⁹。

教育現場の問題を女性の力で解決する作品もある。就学困難な生徒を支援する「太陽光線黄金に注ぐ」(2001 年版ズインミャッカイン)、教え子の父親の輸血の血液集めに奔走する教師に、当の父親が盗みを告白して悔い改める「誠意は運」(2006 年 7 月版テッカドウ・ウィンレビュー)、同僚女性教師 3 名の妨害に耐えて生徒とともに生きる「花を植える手と害虫」(2006 年 12 月版 10 号レードウインダー・ソーチッ 1941- 男)、放課後塾で働く教師と、それにかかわる子供達の生態と成長を描く「アテッ」(2007 年 7 月版 11 号ナツマウ・アニーチョウ前出) などの 4 点である。このほかハンセン病撲滅のために献身する看護師女性を患者の目から描く「赤い女」(2003 年版シェーティンザー 1945-) もある。

なお、女性の有能さを讃える異色作は、14 世紀後半から半世紀にわたり中部ビルマ族と南部モン族の間で戦われた戦闘における逸話を題材にした歴史小説「エームンダヤーの勇士」(2001 年版チウーニョウ 1947- 男) である。モン族の勇士がビルマ族の軍門に下った振りをして情報を収集し帰還した後、援軍を求めるため天然痘の死者を装いビルマの包囲網を突破する。ビルマの船団が遠巻きにする中を柁と泣き女を乗せた舟が水葬のため沖に向かう。作者はこの泣き女の勇気を讃える。非ビルマ族女性の有能さを讃えるこの作品は民族友好と連邦精神涵養の役割も果たす意味で、他とは一線を画す。

女性の有能な資質は第三に母性礼讃作品としても発信される。子供達を道徳的に導く母の知恵を示した「開花する花すべて香り高からんことを」(2003 年版レードウインダー・ソーチッ男前出)、厳しい母に反発して男友達と遊ぶ娘が、身内の協力で危険から救われ母の愛を思い知る「影の傘」(2004 年版カインインムン<ウェイザー・テイパン>) のほか、息子象を国家の使役に捧げた母親象を称賛する「尊き母」(2006 年 7 月版 9 号ネーミョウタン 1943- 男) のような動物ものもある。平凡な母の能力もまた称賛の対象となる。夫を大切に、子供を世話し、家計を助け、親戚のめんどろも見守る母を娘の視点で讃える「世界を造る愛しさ」(2001 年版ネーヌエズインミン)、裕福だが冷淡な息子よりふがいな

48 *は民族文学賞小説部門受賞者。民族文学賞は 1948 年設置のサーバーベイマン賞を前身とし優秀な作品に授与されるビルマでは最も伝統のある文学賞である。現在は、長編、短編集、詩集、児童文学、青少年文学、翻訳など 14 部門がある。

49 2 点の作者はともに『女性問題』に創刊以来かわり、前者は 2005 年まで、後者は現在も発行部に所属する。

い公務員の息子を愛する母を娘の視点から讃える「須弥山より高い」(2006年12月版10号ミヤマフライン), 弟妹の世話に追われ, 独身を貫くつもりが, 親の勧めで結婚し, 3人の子供を育て, 夫を巧みに操縦し, 瞑想修行に出発する寸前娘から子育ての助けを求められて飛び出す母を描く「養育係」(2007年7月版11号マフニンプエー*1951-) など6点で, 典型的なビルマの母の無償の「愛」が讃えられる。

「愛国的」役割を果たす作品はさらに, 「連盟」の活動やその存在を発信する。その第一はエイズ問題を扱った作品である。外国に出稼ぎに出てエイズになって帰国し, 「祖国の文化を軽んじた結果」と後悔して死ぬ娘を級友の男性医師の視点で描く「話そう友よ」(2000年版ドクター・ミンアウン<ターチャーレイ>男), 義兄にレイプされ, 訴えることもできずタイに働きに出てエイズになり, 「連盟」に救出された女性から医師への手紙の形式を取る「落ちた花」(2005年7月版ミヤフナウンニョウ1949-), 翡翠の産地パークカンで金を儲けた男と結婚し, 夫のエイズが感染して死ぬ女性の教訓から, 結婚相手を選ぶのは慎重にと訴える「時が至り成人すれば」(2005年12月版8号ユワディー・キンセインフライン前出) の3点である。「話そう友よ」では, エイズはタイへの出稼ぎ者がビルマに持ち帰ったもので, 「愛国心」の欠如による出稼ぎ行為がエイズ蔓延の原因だとする「連盟」の主張が強調される。

「連盟」の活動発信の第二は, 人身売買防止と女性の更生活動を描く作品である。父の飲酒, 伯父の性暴力から逃れて道路工事の職に従事中売春女性と間違われて逮捕され, 「活動委員会」の更生支援を受ける女性を描く「しおれた花の見解」(1999年版カインインムン<ウエイザー・テイパン>前出), 物売りの娘がだまされてタイに売られるが脱出し「活動委員会」に保護される「家に帰るとき」(2002年版ガンゴウー<ルフム>), お手伝いを探す女性が地方出身少女たちの軟禁現場を目にして関係当局に知らせ救出する「開いた花をしおれさせたくない」(2006年7月版9号マ・レー<モンユワ>前出) など3点である。

その第三は, 「女性への暴力防止」活動を発信する作品で, 飲酒による夫の家庭内暴力への「活動委員会」の解決を期待する「ありがとうございます」(1999年版ユワディー・キンセインフライン前出), 「セイトーとシュエーピー」(2000年版チューチューティン*1942-) の2点がある。第四は, 「連盟」の「環境保護」活動を発信する作品で, 植物への愛を描く「1本を2本に」(2003年版シー<インチン>), 「風とともに」(2006年7月版9号ナッマウ・アニーチョウ前出) の2点がある。第五は, 「活動委員会」主催行事を発信する作品で, 作文コンテスト受賞式に出席する娘を描く「雨季初めと花飾る人」(2000年版ミンテインギーモー1941-), 「チークの若木に敬意を表して」(2002年版同) の2点である。

第六に, 組織主催行事の女性の意識向上における効用を発信する作品がある。食堂を営む女性と息子との結婚に反対する母が「活動委員会」の文化擁護講演会に出席し, 美しく装うことより家事上手が重要であることを認識する「娘たちの基本的知識」(2002年版マウン・ニェインドゥー<ジョビンガウ>1947-男), 母親に反抗する娘が, 母の過去の経

験談と「連盟」の講演会を聞き考えを改める「母と娘」(2005年12月版8号カインインムン<ウエイザー・テイパン>前出)の2点である。なお「母と娘」の母が「ミャンマー」の娘たちに説くのは、「高潔さと処女性の価値を尊重し、身だしなみを慎むように」という「教え」である。ほかに、若い女性の苦難の半生を他の女性啓蒙のために「活動委員会」が活用する「風に揺めく稲」(2000年版ユワディー・キンセインフライン前出)もある。

このほか随想的に、同誌の主張を発信するものがある。女性の勇気を礼讃する「舵を取る人」(2006年12月版10号マ・フニンプエー前出)、長距離バス炎上時の筆者の冷静な対処を描く「波羅蜜の友たちの能力」(2007年12月版カインインムン<ウエイザー・テイパン>前出)、国際会議出席先のカイロで出会った望郷ビルマ人を描く「ミャンマーの人ター姉さん」(2000年版ユワディー・キンウー前出)、親を顧みない子供を嘆く母を批判的に傍観する「3分の1だけください」(2007年版カインインムン<ウエイザー・テイパン>前出)、若い母の決意「胸から生じた問い」(2007年12月版12号リンレッスンダー)などである。

『女性問題』の任務を具現し、「愛国的」役割を果たす小説は、ビルマ式社会主義時代の社会主義貢献小説のプロパガンダの側面を継承し、現軍事政権下で装い新たに登場したジャンルである。プロパガンダ性と芸術性の有機的統一という普遍的な課題に応えることが、今後は運命づけられているといえよう。

(2)「女大学」的役割

「愛国的」役割の小説からは、飲酒による夫の家庭内暴力、身近な男性による性暴力、エイズ、人身売買などの女性をめぐる問題が垣間見られ、女性兵士の「勇姿」は国内に現在生じている「紛争」の存在をも想起させた。これら深刻な問題と女性の「恵まれた権利」のかかわりについて言及する叙述はない。また『女性問題』の任務のひとつであった「恵まれた権利」の発信は、小説の中ではなく評論にのみ見いだせる。『女性問題』においてビルマ女性の問題は、女性の有能さと「連盟」の活躍によって解決されねばならない。加えて『女性問題』は、女性の日常的問題に対する『女性問題』的対処法を発信する。それは男性に寛容で女性に厳しい性の二重基準の支配するビルマ社会における女性の知恵であり、ビルマ版「女大学」とも言えるものである。そのような役割を果たす作品は19点ある。

「女大学」は第一に、恋愛至上主義の愚を排し、女の人生で恋愛を優先すべきないと説く。「間違った夢」(2000年版キンパンフニン1950-)は、裕福で古風な23歳の娘をジャーナル売りの20歳の青年と偶然出合わせ、その正直さと活発さを愛させるが、「愛を優先しないで、愛を捨てる勇気を持ちなさい」との女友達の助言により別れを決意させる。「愛したことがある」(2001年版シュエーティンザー前出)では、愛する画家と出奔して死んだ母の二の舞いを恐れる祖父母と独身の伯母に育てられた娘に、母の道を選ばず愛する人と別れて家に骨を埋める道を選ばせる。

周囲の反対を押し切った恋愛結婚の破綻を描くものもある。親に特別扱いされて育った

優秀な姉娘が恋に落ち、強引に結婚するが夫と父親の不和によって離婚する「どうみても上品な人」(1999年版シュエーティンザー前出)、学業を中断した姉に代わって進学した「つまらない」男と出奔し、出産後夫が別の女性と暮らし始めたため離婚する妹を、姉の親友である「わたし」が支援の決意をする「同じ花同じ葉」(2004年版同)、駆け落ちした娘の夫が酒、博奕、女性問題に加えて暴力をふるうに及んで、家に戻った娘を温かく迎える母の感慨を描く「慈愛の胸元」(1999年版チューチューティン前出)、父に溺愛された裕福な娘が、大学の同級生と駆け落ちするが大家族に召し使い同然に扱われる「建てたい小さな家」(2007年12月版12号ウィンレビュー前出)など4点がある。作者たちが、不幸の原因を男の背信よりもむしろ、親や周囲の助言に耳を貸さなかった女性の軽率さに求める点に注目すべきである。

「女大学」は第二に、結婚後の夫の背信のみならず、結婚あるいは身を任せた相手に本妻がいたことが露呈する⁵⁰物語によって、軽率な行動を戒める。働き者の娘が仕事を転々としてヤンゴンでお手伝いをするうちに近所の金持ち息子と親密となり、男に本妻がいることが判明するが、男を故郷へ連れ帰り野良仕事に精出す「水田の雌鼠の親戚」(2005年7月版シュエーティンザー前出)、大学生の娘が同じ地域に父のもう一人の妻が住んでおり子供もいると知って母に説明を求め、母の寛大さに感服する「母の自尊心」(2005年7月版カインインムン前出)、偶然の出会いで青年実業家とつきあい結婚の日取りも決まり婚前旅行をした娘が、男に妻子がいたのを知って身を引き、「未亡人」同然の人生を送る「ミサキノハナの蕾なら髪に飾りたい」(2007年7月版ユワディ・キンウー前出)など3点がある。「母の自尊心」の母は、詫びを入れて戻った夫に恥をかかせないように努め、「ミサキノハナの蕾みなら髪に飾りたい」の娘の母は、「仏教徒女性」らしく相手の家庭を壊さないことを優先するよう戒め、女の忍耐を美德と説く。

ビルマ仏教に言う前世の因縁とは言え、このような結婚の困難を回避する道はないのか。合理的で有能な女性が親の事業を発展させ、仲間を大切にという母の教えに反して友人を作る寸暇も惜しんで仕事に励み、親の死後裕福だが孤独な晩年を送る「仲間の価値」(2004年版モウパンムン)が、その間に『女性問題』としての答を与えていると言えよう。

「女大学」はしがたって第三に、夫婦間の問題解決の知恵を訓育的に提示する。裕福だが夫の裏切りに苦しむ友人を見て、夫の収入が少なくても愚痴は言うまいと妻が決意する「神の栄耀榮華」(1999年版ヌンジャータイン男)、働き者という妻の価値を認めない息子を母が諫める「価値」(2003年版チューチューティン前出)、酒の席に若い女を同席させた夫に腹を立てる娘に、離婚すれば世間の目が厳しいと思い止どませる母の知恵を描く「ギョウギシバ」(2007年12月版同)、母を妻より重んじる夫に不満を持つ妻が、「女も作らず酒も飲まず母を大切にする夫を恨む理由はない」と友人に諭される「4時の帰りを待

50 財産分与に男女平等を謳うビルマ仏教徒慣習法では、妻の背信行為にたいして夫は相手の男を訴えることが可能だが、夫の背信行為にたいして妻は相手の女を訴えられない。また婚姻は役所に届ける必要がなく世間に周知すれば成立するため、男性側の重婚の事前チェックが困難となる。南田 2001b 解説、同 2002 も参照されたい。後者では個人レベルにおける賢女と迷走自壊する男の組み合わせが国家レベルにも拡大できる点を示唆している。

ち侘びて」(2004年版ユワディー・キンセイフライン前出)など4点がある。酒や女や賭博に溺れぬ夫でさえあれば幸運に感謝すべきであり、たとえ夫が道を外しても耐えて家庭を維持すべきだという母の知恵が授けられるのである。

「女大学」はまた、女性の貞節を賛美する。それは、妻の節操を試し確認した夫が断酒を実行する「ダゴンの美しい月」(2002年版マノウッター・チョーウィン1945-男)ならびに、出家⁵¹した娘を襲った男が大地に吞まれる「火の海の中の一輪の茶色の蓮」(2003年版マウン・サンダー<レーウェー>1947-男)や、出家した妻を夫が檀家として支える「憎みますか」(2007年7月版同)など仏典に依拠した歴史小説によって発信される。

また、随想的に人生の知恵を授ける作品もある。瞑想と祈りで人生を乗り越えることを主張する「病気を治す薬」(2004年版テッター)、成人の子供は結婚させるべきだと説く「どの母が正しいか」(2001年版ユワディー・キンセイフライン前出)などである。

これらの作品は、ときには同誌掲載の「女大学」的評論をしのぐ具体性と説得性をもって、軍事政権のいう「近代的大国家建設」を支える最小単位としての家庭の維持・建設のための知恵の発信につとめるのである。

(3)「人生描写的」役割 そして

「人生描写的」役割を果たす掲載小説は、同誌の任務である愛国心も、文化尊重精神も、女性の優秀な資質も、「連盟」の活動も積極的に発信するものではない。ビルマ社会主義の言論統制の中で顕著な潮流となった「人生描写」小説は、マ・サンダーの作品でも言及したように、さまざまな階層の人々の生活の描写あるいは、日常の中の断片的感慨の描写にとどまり、仮に問題提示があったとしても、解決への道や主張は明らかにしない。それらは以下の30点である。

まず農村小説の書き手として有名なスィンビューヂュン・アウンテイン* (1928-男)の作品が6点ある。疲れ知らずで働く農業労働者女性を描く「早くおいでマ・エーション」(1999年版)、子供と離れ養鶏場で働く女性を描く「息子の母」(2000年版)、村の少女たちのおはじき合戦を描く「苦しまない金」(2002年版)、90歳の母親と70代の子供達の交流を描く「大海に老いはない」(2003年版)、村の若者と美人の物売り女の結婚話が壊れて若者の母親と働き者の村娘を喜ばせる「親知らずの時期」(中編2005年12月版8号)、自転車に乗る青年に胸ときめかす娘が牛車を駆る青年に愛を打ち明けられる「菓子」(2007年7月版11号)などである。

医療現場からの感慨を描くものも3点ある。中絶を希望する大学生の娘と母親に即時結婚し出産することを勧める女性医師の感慨を描く「女ですよ」(2004年版ドクター・ラミン)、搔爬手術に忙しく好きなき氷も嫌いになったと嘆く女性医師の日常を描く「一挙に搔く」(2005年12月版8号スピエノウ1951-)、不特定多数の男性と交わり中絶と出産

51 現在のビルマ仏教では女性の出家は認められず、頭を丸めてピンクの袈裟を着用したティーラシン(沙弥尼)と呼ばれる在家修行者が存在するだけである。

を重ねる精神障害者と女性医師のかかわりを描く「永遠の慈愛」(2006年12月版10号同)などである。深刻な背景を持つはずの望まぬ妊娠が乾いた筆致で淡々と綴られる。

女たちの苦しみを傍観者として観察する独身女性の感慨を描くものも4点ある。夫の暴力、背信、賭博などで離婚する女、耐える女たちを観察する主人公が結婚の意味に答えを見いだせないでいる「浅いようで深い」(2001年版ラミンモウモウ)、義兄の家庭崩壊の顛末を観察する女系家族の独身女性の感慨を描く「誠意の誘い」(2005年7月版ウィンウィンミン<ナンドーシェ>1959-), 世間から「オールド・ミス」と言われる女性が誇りをもって生活と意見を語る「マ・チュエーバン」(2007年7月版11号同)、親に支配される30過ぎの公務員女性が若い男女の恋愛と駆け落ちを観察する「太陽の光が差し込まない」(2007年7月版11号キンフラインチュー)などである。

随想風私小説と呼べる作品は6点ある。そのうち3点がサウンウィンラッ*(1949-男)の作品で、若い頃撮影所でアクション女優と語った体験が「涼しい木陰」(2003年版)に、家の屋根の修理を頼んだ労働者一家との交流が「空き地に近寄り颯爽と」(2005年7月版)に、妻の入院による郊外から市街地への転居が「暖かい懐かしさ」(2006年7月版10号)に綴られる。愚直なゆえに苦勞が耐えない幼友達の農民女性の思い出と再会を描く「大棟」(2002年版マウン・セインウィン<バディーゴン>1950-男)、貧しくて退学したが、常に勇気づけてくれた女友達の回想とその死を語る「額に星」(2004年版ミヤタンダー*1958-), 貧しくても施しのつもりで買い物では値切らず正直に生きた祖母の思い出を語る「マディー王妃の振る舞いのように」(2005年7月版キンミヤズイン1956-)などである。

このほか、1968年のビルマの風景として子供のいない貧しい勤労者夫婦の生活を描く「再び巣作り」(2000年版ヌマイ<インワ>*1957-), 娘との世代のギャップを暖かく受容する母の感慨を描く「母の夢」(2002年版キンスエーウ*1933-), 飼犬の逃亡から帰還までの主婦の感慨を描く「絆」(2003年版テッマー), ジャーナリズムの研修でプノンペンに滞在し、メコン川やトレンサップ湖に接する医師作家の感慨を描く「メコン川の恋人」(2004年版キンパンフニン前出), 公衆電話番屋の娘が観察するさまざまな客の生態を描く「人…人…人」(2005年7月版タンミンアウン*1953-), 夫の家で迎えた新婚第一日の朝の感慨を描く「旅の初め」(2005年12月版8号チューチューティン前出), 遠隔地で鉱石選別作業をする娘から母への書簡である「白い色が銀です」(2006年12月版バティン・アウンタンウー1945-男), 父と夫の板挟みで多忙な主婦の感慨を描く「主婦」(2007年12月版12号キャリア<ウエイザー・テイパン>1938-), 恋人の裏切りにめげずたくましく生きる貧しい花売り娘を描く「花を飾らせて」(2007年12月版12号キンキントゥー*1965-), 生活の知恵を活用して、秤をごまかす女性商人に罰金を払わせた裁判長の経験を描く「それなら納得だ」(2007年12月版12号マノウッター・チョーウィン前出男)など10点がある。

「人生描写」的役割を果たす小説は『女性問題』掲載作品の4分の一余を占める。『女性問題』の任務とかかわることなく、ビルマ女性の生活と感慨のみを描写するこれらが、少

なからず掲載されてきたことの意味に最後にふれておく。それは『女性問題』掲載小説の他の二つの役割と緊密にかかわるものである。すなわち後発のジャンルである「愛国的」役割を果たす作品も、訓育の色彩濃厚な「女大学的」役割を果たす作品も、ともに主張の発信を焦る余り筋の展開に終始し、人物描写に奥行きがなく蓋然性に乏しいものが少なくない。民族文学賞小説部門受賞者を中心として揃えられた「人生描写」作品は、これらの瑕疵を埋め、雑誌の遜色ない水準を維持するためには、不可欠の存在とならざるをえない。現在詩壇を席卷し純文学小説界にも影響を及ぼす「モダン」作品でなく、「人生描写」作品で纏めたところにも雑誌の作り手の側の「見識」がうかがえる。それは「人生描写」小説のビルマ文学界において構築した不動の立ち位置をも反映する。いずれにせよこの国の現実を知悉する者にとっては、『女性問題』掲載小説のすべてが、この国の他のあらゆる言語表象と同様に、表現の限界と行間に埋もれた真実を学ぼうえて適切な素材となることは分明であろう。

おわりに

文学は時代を映す鏡という言い古された言説は、今もビルマ文学界に生きる。実のところ言語による芸術的表象である文学は、他の芸術作品同様にいかなる任務からも不羈であることが許されてしかるべきであるまいか。しかし時代の真実を伝える媒体の機能が不全である社会においては、その言い古された言説がいまなおひとつの伝説として水脈を流れ続けざるを得ない。ビルマ文学界はそのような世界である。

ビルマ女性の問題については現在さまざまな発信がある。ビルマ国内のみならず国外からの発信も多い⁵²。ただし後者は報告や記事などノンフィクションが多く、フィクションは皆無に近い。本稿は国家建設に貢献することを義務づけられる軍事政権下の女性団体機関誌記述事項にのみ依拠し、本文では論評を極力控え同誌の叙述を最大限に活用して⁵³、雑誌の性格と外形的特徴から掲載小説の役割を明らかにした。軍事政権の国家建設に貢献する作品像への言及は初めての試みであり、現代ビルマ文学史の空白を埋める作業の一環でもある。

小説の停滞が叫ばれて久しいが、『女性問題』を見る限りその占める位置は微弱なものではない。さらに「連盟」は2005年から女性作家短編選集『人生の姿の影』を発行し、現在までに3巻が出版される。同書には故人の作品を含め各巻7編から14編が収録される。小説に特化して女性読者に発信することの重みへの「連盟」の認識がうかがえる。その意味するところについてや、今回紙面の都合で扱えなかった詩と評論についての考察は稿を改めたい。最後にこの10年にわたって『女性問題』入手に尽力して下さったビルマ国

52 国外の発信の邦訳ではタナッカーの会2007を参照されたい。

53 とりわけ1の(1)が冗長であるのは、査証申請を考慮してのことであった。現在研究目的の入国は困難であり、研究者は観光ビザで入国しているが、2007年観光ビザで入国した日本人ジャーナリストの銃殺事件以来審査が厳重となり、2008年には日本国内で出版されたビルマに関する日本語の叙述のチェックが開始している。12月段階で筆者の申請も却下されたが、件の箇所はあえて冗長なまま残存させている。

内の協力者諸氏に心からの感謝を捧げる次第である。

参考文献

- タナッカーの会 (編), 2007, 藤目ゆき監修, 富田あかり訳『アジア現代女性史4 女たちのビルマ 軍事政権下を生きる女たちの声』, 明石書店, 東京.
- マウン・ターヤ (編), 1985, 土橋泰子, 南田みどり, 土佐桂子訳『12のルビー ビルマ女性作家選』, 段々社, 東京.
- マ・サンダー, 1985, 堀田桂子訳『欠けているところを埋めて下さい』, 井村文化事業社, 東京.
- 南田みどり, 1991, 「ビルマ 雪どけを待つ赤い石たち」, 風呂本淳子・楠瀬佳子・池内靖子編『女たちの世界文学 ぬりかえられた女性像』, ウィメンズブックストア松香堂, 京都, pp. 208-221.
- 1995, 「現代ビルマにおける女性小説の役割」, 女性史総合研究会編『女性史学』第5号, 京都, pp. 1-16.
- 1996a, 「ビルマ-賢女幻想からの解放を求めて」, 大阪外国語大学女性研究者ネットワーク編『地球の女たち』, 嵯峨野書院, 京都, pp. 54-63.
- 1996b, 「赤い石たちのゆくえ -ビルマ女性小説の過去と現在-」, 世界文学会編『世界文学』No.84, 東京, pp. 60-68.
- 1997, 「囚われのフェミニズム ビルマ女性運動の系譜」, 大阪外国語大学女性研究者ネットワーク編『女の性と生』, 嵯峨野書院, 京都, pp. 115-145.
- 1998, 編訳『ミャンマー現代短編集2』, 大同生命国際文化基金, 大阪.
- 1999, 「ビルマ女性に関する最新二作について」, 大阪外国語大学言語社会学会編『EXORIENTE』創刊号, 大阪, pp. 265-280.
- 2001a, 「軍事政権下のビルマ女性たち」, 大阪外国語大学女性研究者ネットワーク編『地球の女たち』, 嵯峨野書院, 京都, pp. 53-61.
- 2001b, 編訳『ミャンマー現代女性短編集』, 大同生命国際文化基金, 大阪.
- 2001c, 「ビルマ文学」, 宇戸清治・川口健一編『東南アジア文学への招待』, 段々社, 東京, pp. 79-126.
- 2002, 「第8章 ジェンダーと女性 -小説が語るビルマ女性の性と生-」, 東アジア地域研究会 北原淳福編『講座 東アジア現代史6 変動の東アジア社会』, 青木書店, 東京, pp. 217-248.
- 2006, 「ビルマ女性はどうのように語られてきたか: ビルマ女性に関する邦語文献」, アジア現代女性史研究会編『アジア現代女性史』第2号, 大阪, pp.112-131.
- 2008, 「『女たちのビルマ-軍事政権下を生きる女たちの声』によせて」, アジア現代女性史研究会編『アジア現代女性史』第4号, 大阪, pp. 58-63.
- “Kalya Magazine”, Sept. 2007, Yangon.
- Nainggandaw Ayechanthaya Hpwunhpyoye Council, 2007, “2006hkuhnt atwet Amyodha Sapay Tathet Hsu Amyodha Sapay Hsu hnit Sapaybeiman Samuhsu”, Naypyidaw.
- Myanmar Naingganlonghsaingya Amyodhami Yeya Committee, 1999, Jul. “Amyodhami Yeya Magazine”, Yangon.
- 2000, Jul. “Amyodhami Yeya Magazine”, Yangon.
- 2001, Jul. “Amyodhami Yeya Magazine”, Yangon.
- 2002, Jul. “Amyodhami Yeya Magazine”, Yangon.
- 2003, Jul. “Amyodhami Yeya Magazine”, Yangon.
- 2004, Jul. “Amyodhami Yeya Magazine”, Yangon.
- Myanmar Nainggan Amyodhami Yeya Aphwejouk, 2004, “Myanmar Amyodhamimya Yshibyi Ahkwinaye hsaingya Upade Nyi Upade hnit Letswemya hma Kauknoukchet”, Yangon.
- 2005, Jul. “Amyodhami Yeya Magazine”, Yangon.
- 2005, Dec. “Amyodhami Yeya Magazine” No. 8, Yangon.

- 2006, Jul. “Amyodhami Yeya Magazine” No. 9, Yangon.
——2006, Dec. “Amyodhami Yeya Magazine” No. 10, Yangon.
——2007, Jul. “Amyodhami Yeya Magazine” No. 11, Yangon.
——2007, Dec. “Amyodhami Yeya Magazine” No. 12, Yangon.
Pyanchaye hnit Pyidhu Hsethsanye Uzitana (Yonjouk) Satiaphwe, 2004, “Hnahse Yazu Myanmar Sayehsayamya hnit Sazusayin”, Vol. 1, Yangon.
——2006, “Hnahse Yazu Myanmar Sayehsayamya hnit Sazusayin”, Vol. 2, Yangon.
Thu Hka, 1971, “Thu Hka Hmatsu”, Yangon.

(2008. 12. 25 受理)